

和漢併存の系譜

— 『新撰万葉集』 との比較をつうじて

呉 衛峰

はじめに

日本文学における和漢併存は、現存資料からみれば、九世紀末の寛平五年（893年）に成立した『新撰万葉集』がその濫觴となる。上下二巻からなる『新撰万葉集』は、それぞれの歌の左に、一首の七言絶句の詩が合わされていることから、『句題和歌』や『和漢朗詠集』、さらに後代の詩歌合という、歌と詩が同じ集に並べられる和漢併存の系譜に置かれることになる。筆者は従来、『新撰万葉集』の歌と詩は単純な翻訳関係にはなく、和文学と漢文学の対比対照の関係にあると主張している。¹以上の主張に基づいて、本稿は、『新撰万葉集』と比較しつつ、和漢併存の系譜におけるほかの作品における和漢併存の実態を考察しようとするものである。

(1) 和漢併存の系譜

一、句題和歌

平安時代の和漢併存の作品は、『新撰万葉集』のほかにも、『新撰万葉集』の成立と相前後する千里集、いわゆる『句題和歌』(894年成立)と、平安中期の『和漢朗詠集』(1012年成立)と、平安中期以降の詩歌合の系列が文学史上に残っている。

儒臣の大江千里は意外なことに、漢詩文で知られることがなく、『大江千里集』という歌集で名を揚げている。これはその独特な形式で『句題和歌』とも呼ばれて来ているが、千里は成立のいきさつを献上の言葉に記している。

臣千里謹言、去二月十日、参議朝臣伝敕曰、古今和歌、多少献上、臣奉命以後、魂神不安、遂臥重痾、延以至今、臣儒門余孽、側聽言詩、未習艷辞、不知所為、今臣纔搜古句、構成新詞、別亦加自詠十首、惣百廿首、悚恐震懼、謹以拳進、豈求駭目、只欲解頤、千里誠恐懼誠謹言。²

(臣千里謹んで言す、去る二月十日、参議の朝臣勅を伝へて曰く、古今の和歌、多少献上せよと、臣命を奉りて以後、魂神安からず、遂に重痾に臥して、延びて今に至る、臣は儒門の余孽なり、側に言詩を聴けども、未に艷辞を習はざれば、為す所を知らず、今臣纔かに古句を搜して、新詞を構成せり、別に亦自ら詠ずる十首を加へて、惣へて百廿首なり、悚恐震懼、謹んで以て拳進す、豈に目を駭かさんや、只頤を解せしむるを欲す、千里誠に恐懼す、誠に謹んで言す。)

「古句を搜して、新詞を構成せり」、つまり漢詩の詩句を搜して、それを題に歌を詠んだことであるが、これは『新撰万葉集』の序に見える「先生非啻賞倭歌之佳麗兼亦綴一絶之詩插數首之左」(先生啻倭歌の佳麗を賞するのみに非ず、兼ねて亦一絶の詩を綴りて數首の左に挿む)、「つまり詩を作つて歌の左に配することは正反對の方向にある。

さらに、歌を「艶辞」として詩に相對させることは、古今集成立前の、歌の一般的位置づけをつかがわせる。艶辞、または艶詞とは、美辞麗句を意味する言葉だが、詩体として言及されるとき、多くは閨怨情愛を歌う詩を指す。たとえば白楽天が言うように、

郊廟登歌讚君美 郊廟登歌君の美を讚す

樂府艶詞悅君意 樂府艶詞君の意を悦ばす

若求輿論規刺言 若し輿論規刺の言を求めば

萬句千章無一字 萬句千章に一字無し

(白氏文集卷四、新樂府之采詩官之監前王亂亡之由也)⁴

「樂府艶詞君の意を悦ばす」、君意を悦ばせるだけのもので、毛詩大序にもとづいた政治的、道德的風諭の文章ではない。とはいえ、和歌が台頭する機運のなかで、古今集成立前夜の歌人たちは歌を詩と並び称される地位に引き上げようと躍りになって、盛んに詩の字句や手法を取り入れて歌の新体を創出しようとしていた。千里の『句題和歌』はこのような機運のなかにある一つの独特な実験である。

『句題和歌』については、先学の詳細な研究があり、この考察も先蹤研究を踏まえてのものである。⁵ 大曾根章介は『句題和歌』を評して、

句題和歌とは、一般に漢詩の一句を取って和歌に翻案改作したものをいう。平安時代詩会において句題の題詠が行われたが、寛平年間になると一步を進めて句題により和歌を詠するようになった。これは漢詩文の表現や思想を和歌の上に表現し、和歌の世界に新境地を開拓しようとしたもので、その先鞭をつけたのが本作である。⁶

とする一方、「原詩句を直訳した稚拙生硬なものが多い」と指摘している。その「稚拙生硬」な歌を見てみると、たとえば

一、咽霧山鶯啼尚少

やまふかみたちくる霧にむすればやなく鶯の声のまねなる

二、鶯声誘引来花下

うぐひすのなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞ我は来にける

三三、月照平砂夏夜霜

月影になべてまさこの照りぬればなつの夜ふれる霜かとぞみる

六〇、新愁多待夜長来

あたらしきつれへはおほくさむき夜のながきよりこそはじまりにけれ

七六、非暖非寒漫漫風

あつからずさむくもあらずよきほどにふきくる風はやまずもあらなん

一一一、自覚浮雲無所着

我が身をばつかべる雲になせればぞつくかたもなくはかなかりける

というように、ほぼ原詩句を逐語訳に近い形で歌に翻案したものが大半を占める。「鶯声誘引——うぐひすのなきつるこゑにさそはれて」、「新愁——あたらしきつれへ」、「非暖非寒——あつからずさむくもあらずよきほどに」というような表現には、たしかに「生硬」のそしりを免れない面が認められる。

しかし同時に、その生硬さには、和歌表現の拡大を図る革新的意欲が読み取れる場合もある。たとえば漢語の「灰」の対訳である和語の「はひ」を歌に取り入れる実験が以下の歌に見られる。

四一、心緒逢秋一似灰

ものを思ふ心の秋にあひぬればひとつはひとぞみえわたりける

六一、心灰不及炉中火

もの思ふ心ははひとくたくれどあつきおきにぞおよばざりける

一一〇、憂喜皆成灰

かなしきもうれしきことも大かたはこころのはひと成りぬべらなり

「はひ」が歌に詠まれる例は『万葉集』の「思ひし妹が 灰にていませば」（巻第二、213）に見られるが、「心ははひ」というように、一種の心理的境地を表すのに使うことは、たしかに歌にしては新奇さをもたらすものである。「和歌の歌語歌想にも新奇さと豊富さとをもたらせることになる自然な道行」⁷であって、心情表現の語彙の拡大を意図しているのではなからうか。

さらに、

四五、悲秋縁命老

すぎて行く秋のかなしとみえつるはおいなむ事を思ふなりけり

のように、「悲秋」を「すぎて行く秋のかなしとみえつる」と翻案している句には、漢語的表現を和語に馴らす、和化させる工夫が読み取れる。ここにはまた「はひ」の例と異なる側面の実験があるのではないかと思われる。この側面は、「美景」・「風景」を翻案した句にとりわけ明らかにあらわれている。

一四、花下忘帰因美景

花をみてかへらむことをわするは色こきかぜによりてなりけり

七七、風景属閑人

さだめなく吹きくる風をさしわけてなどかしづけき人につくらむ

八七、欲偷風景暫遊春

吹く風のひかりをとめんとおもへばぞしばしも春にあそぶべらなる

この三つの例には、「風景」といつある程度抽象的な漢語をその一字の訓である「風(かぜ)」にうつして、漢語の「風景」の意味をも搭載させ、「風」という歌語に、「風」と「景」の両方の意味を担わせよとすると一面が見られる一方、「美景——色こきかぜ」「美景」を「風景」の同類語として「かぜ」に翻案したのだから、「風景——吹きくる風・吹く風のひかり」という和漢の対応を、題と句を読み比べる、その往復交通において両者の異同を読む側に発見させ、吟味させ、楽しませる趣もつかえよう。後者の点においては『新撰万葉集』における和漢の対応と軌を一にする面白さが見受けられ、『句題和歌』の歌をただ稚拙生硬で片付けられない、もう一つの顔をつかがわせてくれる。そもそも、両者の序に、それぞれ「豈に目を駭かさんや、只顎を解せしむるを欲す」「句題和歌」と「前世の美を偷み尽くして、後世の顔を解せしめん」(『新撰万葉集』)とあるところから見て、ともに和漢の対応に比較対照の面白さを寓していると思われる。

しかし、比較の面白さという類似点があるとはいえず、『新撰万葉集』における和漢併存と比較すると、やはり漢詩の形式の違いに目を向けさせられる。一つの歌に一首の七言絶句が対応する『新撰万葉集』と違って、『句題和歌』の方は、五言または七言の漢詩一句に一つの歌が対応する形になっている。これでは『新撰万葉集』に見受けるような詩想や主題の対応がほとんどありえない。実際、右に掲げた例に見られるように、後ろの離別と述懐の部を除いて、題として選ばれた句はほとんど花鳥風月の域を出ない。そこで、『新撰万葉集』に見られるような、歌と一つの完全な詩的世界との比較対応、和漢の主題的・詩想的対応はとうてい無理なことで、技巧と表現のレベルでの翻案に過ぎない。この点において、『新撰万葉集』の性格は『句題和歌』と根本的に違っている。

『句題和歌』と『新撰万葉集』には、ウツセミを詠む歌がそれぞれ一首見られるが、ここに両集の違いが端的にあらわれているのではないかと思われる。

『句題和歌』、二一六、 蝉不待秋鳴

空蝉の身とし成りぬる我なれば秋をまたずぞ鳴きぬべらなる

『新撰万葉集』、上夏³、4、 蛻蝉之侘敷物者夏草之露丹懸禮留身丹許曾阿里藝禮

(うつせみのわびしきものはなつくさのつゆにかゝれるみにこそありけれ)

蝉人運命摠相同 蝉人運命摠べて相ひ同じ

含露殉滄暫養躬 露を含み滄に殉じて暫く躬を養ふ

三夏優遊林樹里 三夏 林樹の裡に優遊すれど

四時喘息此寰中 四時 此寰の中に喘息す

『句題和歌』の方は、蝉の鳴き声に託されている老衰の象徴を敏感に読み取り、歌において、ウツセミという語に、蝉とはかない人生という両意を担わせている。しかし『新撰万葉集』の方は、詩において、歌のウツセミに託された表裏一体の両意を分離し、悠然自適な蝉と無常な人生を送る人間とを対立させて、和漢の違いをわざと際立たせているのである。⁸

佳句と歌との対応と、完全な詩形の七言絶句と歌との対応との相違は、字数の多少にとどまる問題ではなく、そこに表現や技巧の比較を超えて、歌想と詩想、和漢文学の実践的理念の異同の比較をはらんでいると認められる。

二、和漢朗詠集

創作と撰集の相違を描いて、詩形の点で言えば、『和漢朗詠集』に選ばれた漢詩の位置づけは『新撰万葉集』より『句題和歌』に近い。というのは、『和漢朗詠集』に選ばれた漢詩の佳句は、ほとんどは二句一聯のもので、絶句や律詩のような完全な詩形によるものではない。『和漢朗詠集』は成立年不詳であるが、十一世紀の初頭に藤原公任によつて編まれたことは確かである。そしてなによりも、和漢併存の作品の中で一番読まれたもので、後世の日本和漢文学両方に多大な影響を及ぼした。後に『千字文』、『李嶠百詠』、『蒙求』とともに「四部ノ書」と称され、幼学の教科書として読まれていたこと。は、後代の教養における『和漢朗詠集』の意味の大きさを示していると同時に、中国文学の滋養の吸収における表現技法中心の趨勢をも端的にあらわしている。

『和漢朗詠集』は上下二巻からなるもので、上巻は春夏秋冬という四季の四部のもとに、それぞれの季節にふさわしい小部立てが設けられ、下巻は雑の部のもとに、自然や人事の小部立てからなる。各小部立てには、中国漢詩・日本漢詩・歌という順で、佳詩句と佳歌が並べられている。

一つの小部立てには漢詩・歌が並べられており、それが自然に漢文学と和文学の比較の場となる。ここで秋のもとにある「鹿」という小部立ての内容を引いて、その比較の現場を見てみよう。

蒼苔路滑僧歸寺 紅葉声乾鹿在林 温庭筠

蒼苔路滑ちかにして僧寺に歸る 紅葉声乾いて鹿林に在り

暗遣食苹身変色 更随加草徳風来

白鹿
紀

暗に苹を食つて身の色をして変せしむ 更に草に加ふる徳風に随つて来る

もみぢせぬときはの山にすん鹿はおのれなきてや秋をしるらむ 能宣

ゆふづくよ小倉の山になく鹿のこゑのうちにや秋はくるらむ 貫之¹⁰

二首目の漢詩は紀長谷雄による作品である。吉祥の印としての白鹿が詠まれて、ほかの三作品とは異質であるが、漢詩における鹿の一つのイメージを見せている。温庭筠の詩は『毛詩』『小雅』の「鹿鳴」篇を踏まえておらず、むしろ秋の実際の風情を描出している。この詩は能宣と貫之の歌とともに、鹿の声に秋の季節感を寓しているもので、『新撰万葉集』の歌と詩にみる妻恋いと宴・友情の詩想的対照・比較が発見できない。実際、漢詩における鹿は歌とは違って、さほど秋と結びつけられているわけではなく、むしろ『和漢朗詠集』が、詩を歌の季節に合わせて選んでいるのである。妻恋いといえ、同じく秋の部のもとにある「萩」には、

秋の野の萩のにしきをふるさとに鹿のねながらうつしてしかな 元輔

とあるが、この小部立てに漢詩が一作品だけ、しかも他ならぬ『新撰万葉集』から選ばれている。

暁露鹿鳴花始発 百般攀折一枝情 (新撰万葉集上巻秋⁴³)

暁の露に鹿鳴の花始めて発く 百般攀折す一枝の情

ここの「鹿鳴」は、下の花といっしょに「鹿鳴の花」と読むことと、「鹿鳴いて」と読むという二つの読み方ができる。萩は日本で鹿鳴草と呼ばれていたことから、「鹿鳴花」という言い方ができたのだろう。「この部立てにも、詩想的異同・対照という意味での和漢比較の意図が読み取れない。

しかし、意図的にせよ、意図的でないにせよ、『和漢朗詠集』から詩と歌、乃至中国詩と日本詩・歌の間に、詠まれ

たものの季節の差が顕著に出る場合がある。たとえば夏の部のもとにある「蝉」という小部立ての詩句と歌を見てみよう。

嬋々兮秋風 山蝉鳴兮宮樹紅 驪宮高
白

嬋々たる秋の風に 山蝉鳴いて宮樹紅なり

千峯鳥路含梅雨 五月蝉声送麥秋 李嘉祐

千峯の鳥路は梅雨を含めり 五月の蝉の声は麥秋を送る

鳥下緑蕪秦苑寂 蝉鳴黄葉漢宮秋 許渾

鳥緑蕪に下りて秦苑寂かなり 蝉黄葉に鳴いて漢宮秋なり

歳去歳來聴不変 莫言秋後遂為空 紀

歳去り歳來つて聴けども変ぜず 言ふことなかれ秋の後に遂に空しく為んなむとすといふことを

夏山のみねのこずえしたかければ空にぞ蝉の声もきこゆる

季節の言葉が出ているものだけ引いたのだが、夏という部のもとに収められながら、「夏」の歌一首に対して、「秋」の詩が三首となっている。撰者がかならずしも意識的に和のセミの夏に漢の秋を対応させているとは思われないが、やはり佳句佳歌を選んでいるうちに、そのズレが自然に出てきたのであろう。¹²

結果的にいえば、歌と詩に詠まれたものの時節のズレを楽しめるのは『和漢朗詠集』だけで、同じくセミを詠む前掲

『句題和歌』二六の「蝉不待秋鳴」という題とその歌「空蝉の身とし成りぬる我なれば秋をまたずぞ鳴きぬべらなる」からは、同じ面白さが得られない。そもそも中国の漢詩が歳時記的に詠まれることはなかった。四季の変化に対する日本文学特有の繊細な美意識がこのように和漢同居の『和漢朗詠集』の部立てに影響したのであって、実際その小部立ての立て方は歌の季節分類によって行われたと考えてよからう。漢詩が歌の季節分類に合わされているなかに、セミの小部立てのようなズレも自然に出てくるわけである。

しかし九月尽という小部立てに収められている作品において、我々は詩と歌の景物の季節的ズレというより、中国(詩)と日本(詩と歌)による季節の詠み方のズレを認めるのである。九月尽とは、九月三十日、秋の最後の日に詠んだ惜秋の詩や歌である。

縦以嶠函爲固 難留蕭瑟於雲衢

縦令孟賁而追 何遮爽籟於風境 順

たとひ嶠函をもつて固めとすとも 蕭瑟を雲衢に留め難し

たとひ孟賁をして追はしむとも 何ぞ爽籟を風境に遮らむ

頭目縦隨禪客乞 以秋施与太應難 順

頭目をばたとひ禪客の乞はむに隨ふとも 秋をもつて施し與へんことはなはだ難かるべし

文峰案轡白駒景 詞海艤舟紅葉声 以言

文峰に轡を案ず白駒の景 詞海に舟を艤ふ紅葉の声

山さびし秋もすぎぬとつぐるかも槇の葉ことに置けるあさしも 八束

くれてゆく秋のかたみにおくものはわがもとゆひの霜にぞありける 兼盛

二首の歌に対して、選ばれた漢詩は全部日本の漢詩人による作品で、中国詩人の作品は一つもない。その理由は、太田郁子が指摘したように、九月尽という、九月の最終日に秋を送ることは、白居易が始めた春尽、つまり三月尽から発想を得て、惜春から惜秋へ拡大した結果にある。¹³

白居易が春尽、三月尽というテーマをひらいたのであるが、中国の漢詩には秋尽、九月尽というテーマは存在しない。ゆえに、「九月尽」の小部立には、歌と日本の漢詩しか選ばれておらず、そこに中国文学と日本文学における時節の詠み方の相違があらわれている。以上は二つの顕著な例に過ぎず、このような和漢比較対照の視点からほかの部立もつぶさに読んでみれば、『和漢朗詠集』はまた隠されていた新鮮な読み味を我々の眼前に供してくれるのかもしれない。四季折々の景物という和文学的感性で漢詩が選集されるとき、そこにおのずから比較の可能性が秘められ、我々の発見を待っていると言っても過言ではなからう。

三、詩歌合

和漢の比較対照という視点に立つてみれば、詩歌合ほど恰好な材料はなからう。ほぼ一方通行の『句題和歌』と、佳句の撰集である『和漢朗詠集』と比べて、歌と詩を同じ場で一番ずつ競詠させ、判者が優劣を判定するという詩歌合は、和漢の比較そのものである。

しかし、詩歌合は平安時代の後期に成立したものの、その大成を見たのは鎌倉時代に入ってからのことであるため、『新撰万葉集』と『句題和歌』と『和漢朗詠集』などに代表される、平安初期から中期にかけての、古今集成立前後という時代的背景から遠く離れている。したがって、文学史における意味がおのずから異なっている。

しかしながら、詩歌合の成立には、『和漢朗詠集』の影響が大きいと言われている面もあって、『新撰万葉集』・『句題和歌』・『和漢朗詠集』・詩歌合という和漢併存の系譜の中で考察してみる必要がある。

峯岸義秋は平安初期から中期にかけての時代に孕まれていた漢詩と和歌を対照させる興味について論じたとき、『新撰万葉集』を取り上げて以下のように述べている。

これは前にも述べたやうに、古今集和漢序、ひいては和漢朗詠集にまで統をひく、思想的裏づけの濃い系譜の最初の段階を示すものであるが、それはまだ詩歌合以前の様式である。(中略)また、朗詠系統が詩歌合成立の原動力となつてゐることをあらためて認識しておくのである。¹⁴

朗詠系統の影響によるものゆえか、初期の詩歌合は一つの歌と詩の一聯を番えるものが多い。『元久詩歌合』と『文安詩歌合』は詩歌合の双璧と並び称されるものであるが、詩歌合の様式を確立させた『元久詩歌合』(1205年)においては「水郷春望」と「山路秋行」という二つの題のもとで、歌一首と七言漢詩の対句一聯ずつが三十八番競い合った(ただし、現存の伝本においては二十六番以降の詩が欠けている)。

『元久詩歌合』の一つの特徴として、諸家がすでに指摘したところであるが¹⁵、「水郷春望」の題のものとの名所詩歌的なところが挙げられよう。たとえば三十八番の歌と詩は以下のようになっている。

七五、風緑杭州春柳岸 煙青吳郡暮江松

七六、志賀の浦のおぼろ月夜の名残とてくもりもはてぬ曙の空¹⁶

詩は杭州・吳郡という中国の景色の名所を詠み、歌は志賀の浦という日本の名所を詠んでいる。日本の漢詩は必ずしも

中国のことだけを詠んでいたわけではないので、詩は中国の景色、歌は日本の名所という按配で詠まれているところは詩歌合という文芸形式によるもので、詩歌競詠・和漢対照の意識から出たと考えてよからう。

しかし一方、歌と詩の競い合いは和漢の特質を際立たせると反対の方向に、歌風と詩風を歩み寄らせているという意見も出ている。歌の方については、峯岸は宗祇の吾妻問答を引用して、

「歌も詩歌合の時は、長高くよめと申す事待るとかや」とあるのも、つまり詩歌合がもたらした新古今時代の和歌への影響を物語るにほかならない。¹⁷

という見解を示している。詩の方については、堀川貴司は『元久詩歌合』の詩について

詩と歌とを合わせるといふ困難さを、形式・内容ともに詩の側から歌へすり寄るような形で克服したことは、詩に
とつては必ずしも有益でなかつたように思う。譬喩・比興・本文といった表現を自ら封じたことは、その独自性を
失わせ、ひいては「王朝漢詩」そのものの衰退にもつながつたのではなからうか。¹⁸
という。

このような指摘がなされるのは、漢詩は一聯だけであるというところに原因があると私は考える。一つの歌に絶句一首の詩を番えるという詩歌合においては、この指摘はさほど問題にしなくても良いであろう。

はじめて一句または一聯ではなく、一首全体を詠んだのは、康長二年（1343年）に行われた『五十四番詩歌合』である。「この詩歌合でとくに注目されるのは、絶句全体をそのまま提示してゐることである。ここに朗詠様式的なものに完全に拮抗されたといひ得る」¹⁹と評されるように、以降の詩歌合に新しい道を開いている。

この詩歌合は詩歌合の題としては珍しく、「幽思不窮」というものがあり、そのもとに競詠された歌と詩を一番引いてみると、

五九、花落鳥啼深掩門 疎鐘寂寞亦黄昏 恩情空去絃歌絶 独对春风拭淚痕

六〇、こひしなげぶりとなりてうき人にのちの世までもたちやそはまし

というように、実は詩は閨怨、歌は恋という按配になっている。この題における「幽思」という字の詠まれ方には、閨怨詩と恋歌の対応が見られるほか、もつと広い意味で使われる「幽思」の二字がここで閨怨・恋に限定されていることが分かる。詩歌合において詩のテーマが大いに歌に合わされ、歌想と詩想が接近している例となる。

『五十四番詩歌合』より有名な『文安詩歌合』（1446年）には、各歌に一首の七言絶句が番えられているだけでなく、競詠の判詞もついている。「野外秋望」・「仙家見菊」・「松声入琴」という三つの題のもとで歌と詩が詠まれ、競い合ったのであるが、三つの題はあきらかに漢文学の背景をもっており、とくに後二者は漢詩的故実が題となっている。「野外秋望」のもとに詠まれた一番を見てみると、

五、行尽京塵芳草紅 携筇野外立西風 山裁錦繡江羅帶 万里雲天一目中

六、雲はるるいはたのを野の秋風に山のはみえて月ぞさやけき

とある。その判詞は

唐律の詩は、いかにも三四句一意にいひくださるべきにや、山錦江羅の勝景をすてて忽渺茫たる万里の雲空に目をあそばしむべき事、いかがとおぼえ侍り、又いはたの小野の秋風に山のは見えて月さやかなる風情は、いづくの野べにてもいふべきにや、うすくこきははそのもみぢに山路しぐれて月かげのうつろひ侍らんや、なほみどころは侍らん

というように、詩の方は絶句の起承転結の基本的作法より逸れていることを指摘し、歌の勝ちとしたことで、詩のあるべき姿、歌のあるべき姿を見定めて判定をくだしていることがうかがえる。

おわりに

以上、『句題和歌』・『和漢朗詠集』・詩歌合を一つの系譜として、和漢併存の文芸様式の流れを考察してみた。そこに共通するところは、歌と詩を理念的に同一なものとして見るまなざしではなからうか。『句題和歌』は句題詩という形式の胴体を歌にすげ替えて作成したもので、句題と和歌との間の往復交通を楽しむという鑑賞の仕方があるとはいえ、制作においては、基本的には詩から歌への一方通行の性質が強く見受けられる。『和漢朗詠集』は和漢の佳句を四季中心に編纂して併置させた作品で、そこには和漢の差異を意図的に顕在化させるまなざしが見られず、むしろ和漢が同じ文学理念を共有していることを主張しているような編纂方針がある。そして詩歌合は、佳句集の編纂ではなく、詩歌制作の現場であるが、ここにはやはり比較対照というより、歌から詩へと、詩から歌へと歩み寄りと気配りが目立つ。

そうであれば、『句題和歌』・『和漢朗詠集』・詩歌合という系譜は、古今集序に代表される和漢文学の観念的同一への志向という時代の気運の中において見るべきであろう。そこには、句題や佳句という変形された漢詩の場に和歌を持ってきて対応させ、和漢融合を実現させようという視線が強く感じられる。このまなざしは歌人または歌の視点から詩を見るものであると考えられる。この系譜に『新撰万葉集』を置いて見れば、和漢の対照的対応という異質性が鮮明に浮かび上がってくる。『新撰万葉集』は漢詩、または漢詩人の立場で和歌を見るまなざしではなからうか。この時代の気運からの逸脱は、あるいは「漢から和へ」と「和から漢へ」という複眼的なまなざしによるものと言えるかもしれないが、その序における理論的言説にはあらわれず、作品の中において実現されたのである。

注

- 1 「和歌と漢詩・詩的世界の出会い——『新撰万葉集』をめぐって——」『比較文学研究』67号（東大比較文学会、1995年10月）、「和歌と漢詩の出会い——『新撰万葉集』における「あやめ草」と「菖蒲」をめぐって——」『文学・語学』156号（全国大学国語国文学会、1998年10月）、「『新撰万葉集』における漢詩への一視点——夏の「蝉」をめぐって——」『国語と国文学』83巻3号（東京大学国語国文学会、2006年3月）参照。
 - 2 本稿における『句題和歌』の引用は群書類従本による。なお、本稿における引用は、『句題和歌』に限らず、すべて通用漢字を使用する。
 - 3 本稿における『新撰万葉集』の引用は、寛文七年版本（浅見徹・木下正俊『新撰万葉集・校本篇』私家版）による。
 - 4 白氏文集は四部叢刊『白氏長慶集』（商務印書館影印本）による。
 - 5 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇』（培風館、1944・12）、第七章、第二節「句題和歌に於ける千里の作歌技巧」、三三三～三四九頁。
 - 6 小沢正夫『古今集の世界（増補版）』（塙書房、1976・5）、第九章、三「古今集時代の句題和歌」、二九七～三一六頁。
 - 7 『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「句題和歌」という項目。
 - 8 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇』、三四二頁。
 - 9 小論「『新撰万葉集』における漢詩への一視点——夏の「蝉」をめぐって——」、注1を参照。
 - 10 大曾根章介・堀内秀晃『和漢朗詠集』新潮古典集成（新潮社、1983・9）、三一九頁。
 - 11 本稿における『和漢朗詠集』の引用は、日本古典文学大系（岩波書店、1965・1）による。
 - 12 柿村重松『和漢朗詠集考証』（藝林舎、1973・12）、二五〇頁。
 - 13 小野泰央『和漢朗詠集』の「蝉」について（白門国文七号、1988・3）を参照。
 - 14 太田郁子『和漢朗詠集』の「三月尽」と「九月尽」（国文学 言語と文芸、九十一号、1981・3）。
 - 15 『歌合の研究』（三省堂、1954）、四〇八～四〇九頁。
 - 16 田尻嘉信「名所歌小考——「元久詩歌合」臆断——」（『国文学研究』第四十三集、1971・1）。
- 本稿における詩歌合の引用は、すべて新編国歌大観（角川書店）による。

17 注14と同じ、四一四頁。
18 「元久詩歌合」について——「詩」の側から」（国語と国文学、71巻1号、1994・1）、二七頁。
19 注14と同じ、四二三頁。